

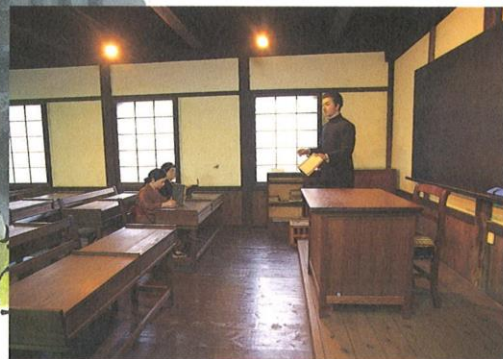
「明治維新」を迎えて、戸籍、徴兵、地租改正、学校など郡内地域の人々も否応なく変化の渦に巻き込まれていくわけですが、明治六年五月の藤村紫朗山梨県権令の谷村出張もそうした変化を象徴する出来事でした。当時飛ぶ鳥を落とす勢いであつた山梨県権令が谷村にやつてくるといふ大事件に、「藤村権令が谷村に入庁する以前に斬髪すること」という文書が各村々に届けられ、半ば強制的に斬髪が行われたことが伝えられています。「新しい時代」の意識は、斬髪とともに庶民の生活に浸透していったと言ってもいいかもしれません。

ところで、藤村紫朗権令は「学校トイ工バ必ズ洋風模擬ノ構造ニアラザレバ、其用ヲナサザルコトト心得候」という通達を発したこと知られ、洋風建築の学校は「藤村式建築」と呼ばれ当時県内各地に建てられました。この藤村式をいち早く取り入れたのが桂川左岸の小高い丘に建てられた公立小学尾県小学校です。明治十一年五月、小形山の人々の念願の木造二階建て、正面二階に丸型バルコニーのついたモダンな校舎が完成しました。続く十二年二月には公立小学谷村学校の

明治の学校

洋風二階建ての新校舎が落成しています。谷村学校の前身は、一般子弟の教育のため谷村陣屋内に設けられた教諭所が嘉永四年（一八五二）「興讓館」となつたもので、明治四年十二月に新政府の指導により公立小学校となっています。

このほかにも、明治七、八年頃を中心に学校が設立されていきますが不就学率が高く、女子の生徒数は極端に少ないのが現状でした。ちなみに、明治十四年尾県学校では、学齢生徒のうち就学生徒は六十八人（男子六十八、女子〇）、田野倉学校では就学生徒は六十三人（男子五十二、女子十一）、不就学生徒五十五人（男子七、女子四十八）で、安い労働力として家計を支えた子どもたちの姿が浮かび上がってきます。特に女子は機業に従事している場合が多く、三十二年の時点でも男子就学者の三分の一強に過ぎませんでした。



●尾県小学校
1階玄関を入ると左右に教員室と使丁室があり、同じ広さの教室があり、校舎の左右に教室に入る昇降口が付けられている。2階には講堂があり、書籍室と御眞影奉安室があつた。昭和16年3月31日、田野倉小学校とともに禾生尋常高等小学校に統合されたため廃校となったが、48年11月復元され現在は教育資料館として地域の人々の手で運営されている。

